令和4年度　学校評価報告書【国立市国立第三中学校】

学校教育目標	◎ 自ら考え正しい判断のできる人　○ 強い意志をもって実行できる人 ◎ 思いやりの心をもって助け合う人　○ 心身を鍛える人	重点目標	「自ら考え正しい判断のできる人」、「思いやりの心をもって助け合う人」

学校教育目標	中期的目標	短期的目標	具体的な方策	評価指標	達成状況 中間評価	達成状況 最終評価	分析	改善策	学校評議員評価
自ら考え正しい判断のできる人	深く考える生徒の育成	主体的に学び、深く考える機会を意図的・計画的に設定し実施していく。	・「主体的・対話的で深い学び」による授業の充実 ・考えを深めるための課題設定と発問の工夫	・生徒による授業アンケートの数値向上（年度当初と年度末） ・毎時間、「本時のねらい」を明示、授業の最後に「本時のふり返り」を確実に行う。 ・生徒が考えを深めることができる学習課題の設定と発問の工夫を行っているか。	A	A	・生徒による授業アンケートでは、「よくあてはまる」「ややあてはまる」の肯定的な回答が多い。 ・全ての教科で「本時のねらい」を明示し、授業の最後に「本時の振り返り」を行う授業形態が定着している。 ・毎学期１回、管理職による授業観察及び教員の授業相互参観を実施し、「深く考える生徒の育成」に向けた課題設定や主発問の工夫を追求している。	・個々の生徒の学力向上に向けて「わかりやすいねらいの提示」、「課題設定・発問の工夫」、「ふり返り・まとめ」の更なる改善に取り組む。特に「ふり返り・まとめ」の時間を確保するために授業内容の精選を行い、三中スタンダードである「個→集団→個」の構成による授業を、50分の授業時間内に収めるように意識付を図る。	・デジタル機器の活用は時短の実現にもつながる。生じた時間をさらに有効に活用する努力を望む。 ・少しずつ再開していこうとするチャレンジは評価したい。三中だから可能ということもあると思うので、積極的に様々なことを取り入れていくことがさらに充実した学校生活につながると思う。 ・タブレット端末の使用が進む一方で、画面では分かるが文字で書けない子が増えているように感じる。 ・タブレット端末の使用で差が出ないように工夫しながらより生徒が考え、向上するよう学習してほしい。 ・デジタル採点の利点は分かったが、先生方が答案用紙を見直しながら個々の生徒の苦手分野を把握できているのかと疑問に思った。
			・各教科で身に付けた力を生かす問題解決的な学習活動 ・GIGAスクール構想の具現化に向けたICT機器の活用 ・持続可能な社会の創り手となる生徒の育成を目指すため、SDGｓの校内研修会を実施	・教科等横断的な取組 ・一人一台タブレット端末の効果的な活用 ・「SDGs三中プログラム」の学習を通し、持続可能な社会づくりに向けて考えることができたか。		A	・昨年度に引き続き、年間指導計画にSDGsの目標を明記し、教科書や学力調査のSDGsの項目を指導した。 ・タブレット端末を文房具のように、日常的に活用することができるようになってきた。昨年度以上に、ICT機器の活用及び教科横断を意識した計画的な授業を行った。 ・SDGs三中プログラムを全学年で活用し、物事を持続可能な視点から考えたり、どのような考え方が持続可能につながっているかを考えたりする学習を行った。３年生になると、自然とSDGsの考え方が学校生活に生かされるようになっている。	・全国学力・学習状況調査にSDGsに関する問題が出題されていたので、そのような問題を教科の指導で積極的に活用していく。また、SDGsに関する問題（教材）を各教科で開発できるようにする。 ・今年度はICT支援員の方と多く連携をとりながら、ICTの活用に努めることができた。来年度はさらに計画的にICT支援員の活用を図りながら、生徒に効率的にタブレット端末を活用させる。 ・「SDGs三中プログラム」が各学年でよりよい内容に更新されているので、総合的な学習の時間の時間数と調整しながら、プログラム内容を改良する。	
		個に応じた指導を充実させ、知識・技能の習得を図る。	・習熟度別授業（数学） ・少人数授業（英語） ・補充教室、質問教室の実施 ・ｽﾏｲﾘｰｽﾀｯﾌ、特別支援教室「かがやき」との連携	・効果的な習熟度別授業、少人数授業の実施 ・補充･質問教室の実施、生徒の参加促進 ・SS、特別支援教室専門員、特別支援教室巡回指導教員との連携による個別指導の充実	A	A	・習熟度別授業、少人数授業は予定通り実施。 ・定期考査前の質問教室を全学年で実施した。また、外部人材を活用しながら、夏季補充教室を全学年で実施した。来年度以降も生徒の参加を促し、効果的な補充教室を実施したい。 ・スマイリースタッフ、特別支援教室「かがやき」巡回指導教員及び専門員、スクールカウンセラーと連携しながら、特別支援教育を推進している。	・生徒の授業評価、少人数指導アンケート等客観的資料に基づく分析を定期的に行い、より適切な少人数編成等に生かす。 ・夏季補充教室だけでなく、３年の数学を中心に放課後の補充学習を行った。利用者が少なかった(各回5名前後)ので、この放課後の学習をもっと計画的・効果的に活用したい。 ・引き続き学級・学年教員との連絡を密にし、効果的な指導に向けて成果と課題をまとめる。また「かがやきだより」を発行するなど、特別支援教室の周知に努める。	・一人一人の学習に対してフォローすることを考えているという話を聞くことができた。 ・個に応じた指導で取りこぼしのないようにしてほしい。 ・夏季補充教室での高校生ボランティアが復活するとよい。
・強い意志をもって実行できる人 ・思いやりの心をもって助け合う人	・自己実現に努める生徒 ・励まし合い、支え合う生徒	いじめ・不登校傾向の早期発見と早期対応	・校内いじめ防止対策委員会を毎月開催する等、いじめ未然防止と迅速な対応 ・生徒によるいじめ防止活動（スクール・バディの活動） ・子どもと家庭の支援員、ｽｸｰﾙｿｰｼｬﾙﾜｰｶｰとの連携 ・学校生活満足度(QU)調査を5月と10月に実施、これを踏まえた校内研修会を6月と11月に実施	・新たな不登校生徒を出さない。 ・いじめ・からかいアンケート及び学校生活満足度(QU)調査、日常の生徒の言動から、いじめ認知をすることができたか。 ・深刻ないじめがなくなったか。	B	B	・令和４年11月30日現在、学校生活において認知されたいじめの件数は６件（速報値、昨年は15件）。不登校生徒は25名（昨年は24名）。 ・SSW、SC、家庭と子供の支援員、子ども家庭支援センター、児童相談所、教育支援室と連携しながら対応している。 ・悪口やからかい、人の嫌がる言動は依然として見られる。 ・校内研修等を通じて、軽微な案件を見逃さず、早期対応・早期発見につながる個々の指導力及び組織対応力の重要性の周知・徹底。 ・いじめ対策委員会資料にQUの結果を反映させ、いじめ・不登校などの問題行動の予防対策に活用している。	・軽微な案件を見逃さず、早期対応・早期発見につながる個々の指導力及び組織対応力の質をさらに高めるよう校内研修を充実させる。 ・毎月１回開催する校内いじめ対策委員会を軸とし、情報共有と共通理解、対策・検討を綿密かつ確実に行う。担任が抱え込むことがないよう、相談しやすい雰囲気を醸成する。 ・スクール・バディを通じた生徒主体のいじめ防止活動をさらに充実させられるよう、指導・助言を行う。	・いじめの件数減少は、早期発見・早期対応の成果と評価できる。 ・Q-U調査でより深く生徒の気持ちを理解するとともに、学校生活の向上にも活用されていた。今後どのように活用するかも興味深い。 ・思いやりの心をしっかりもち、ぶれない心と多角的な視点をもって広い視野で取り組むことが大切である。
		豊かな心を育む教育活動	特別の教科 道徳の授業を要としたこころの教育の充実	・教科書によって計画的に行う「考え、議論する」特別の教科道徳の授業の充実 ・道徳授業地区公開講座の活性化 ・校内研究テーマ：深く考える生徒の育成～考え議論する「特別の教科　道徳」の授業を通して～ ・道徳科に特化した校内研修会を年７回実施(大学教授を招聘)	A	A	・外部から講師を招聘した研究授業を年間６回、研修会を年間６回実施し、教員が相互参観することで授業力の向上に努めた。 ・学年の全教員がローテーションで授業を行った。特に「考え、議論させる」ための「個→集団→個」で考える手法は定着している。ローテーション授業に割り当てられていない教員は、自主的に他の教員の道徳授業を参観し、授業力向上に努める姿が見られた。 ・校内研究の担当者が、研究授業・研修会ごとに教員向けの「校内研だより」を発行し、振り返りを行うことができている。その校内研だよりを参考に、次の研究授業者がよりよい指導案を検討・作成している。 ・保護者や地域の方に、「特別の教科　道徳」について、理解を深められるように学校からの発信を行うことができた。	・講師の指導及び助言を踏まえ、授業展開の発問をさらに工夫し、深い学びにつながるような発問を考える。 ・評価の内容は、授業の様子や記述内容を多くの教員が見取り、生徒がさらに前向きになり、励まされる評価を目指す。 ・保護者や地域の方にも、「特別の教科　道徳」について、理解を深められるように学校からの発信を行うとともに、補助教材やワークシート類を学期ごとに持ち帰らせ、保護者の方にも確認していただく。 ・タブレット端末を使用すると考えが深まらないことがあるため、ワークシートやノートを併用しながら指導し、生徒の生の声を大切にした指導を心がける。	・自分の意見をしっかり生かせるよう自信をつけ、相手の意見を聞いて理解し、受け入れる心の余裕を持てるようになるとよい。 ・タブレット端末のメリット、デメリットを考えながら授業を工夫し、そのために先生方が学んでいるという姿勢が素晴らしい。 ・公開授業がオンラインでも見られると嬉しい。
			様々な、生徒の主体的な活動実施	・主体的な生徒会活動の継続（あいさつ運動、いいことしようDAY、新入生説明会、生徒総会、部活動対抗駅伝、カジュアルウィーク等） ・スクール・バディ活動の充実 ・SNS三中ルールの継続と改訂、周知の工夫	A	A	・生徒会本部を中心にボランティア活動(いいことしようDAY・装飾しＹＯ！)を実施。スクール・バディは定例会を行い、いじめ防止策の検討・バディ新聞の発行（毎月）等、いじめ防止に取り組んでいる。「考えよう！いじめ・SNS＠Tokyo」や「changers」などのHPを活用し、全校生徒へ啓発活動を行っている。カジュアルウィークは初の取組であったが前向きによく取り組んだ。 ・SNS三中ルールを定着させるため、生活委員を中心に啓発活動を実施中。８月のアンケート（夏休みの宿題）では、携帯所持率は89.3％（前回比-0.1ポイント）、所持者のフィルタリング率が87.2.1％（前回比＋8.1ポイント）、家庭ルールは96.4％（前回比-0.4ポイント）という結	・バディ新聞の充実、バディの対応や声かけの強化。 ・SNS三中ルールの周知・徹底。保護者への情報発信。長期休業に「SNS家庭ルールを守って生活しよう」という宿題を出し、スマホに振り回されない生活を送れるよう、また、保護者との会話が少しでも生まれるように意識付けを行う。 ・本年度中にSNS三中ルールの改定を行う。 ・カジュアルウィークは内容を工夫しながら継続させる。	・様々な行事の復活は、「withコロナ」を踏まえ教職員や生徒の創意工夫と努力を感じることができた。様々な体験を重ねることで柔軟な対応力が育つであろう。保護者の参加がもっと増えるとよい。 ・スマホの所持が当たり前をとなってきてるので、親も持たせる責任を考えてほしい。 ・登校中の生徒がきちんと挨拶をしてくれとても気持ちがよい。気難しい年頃ですが素直に育っている生徒が多いと思う。 ・カジュアルウィークの取組は生徒の自主性を育む素晴らしい取組で、地域の反響も大きかった。
		学校行事への主体的な取り組み		学校行事（体育祭、合唱コンクール、学習総合発表会）の充実	B	A	体育祭、合唱コンクールともに、withコロナを考えつつ通常に近い形で実施でき、生徒が大きく成長できた行事となった。３学期は学習総合発表会を実施。他学年の発表・作品を見る機会をつくり、「次は私たちがより良い発表・作品を作り上げる番である。」という思いを経験させたい。	社会情勢に応じた柔軟な対応及び行事の内容を精選し、工夫しながら行事を行う。	
心身を鍛える人	自らを磨く生徒	豊かな人間性を育む活動	キャリア教育の充実	・進路指導の充実 ・模擬面接実施（立川青年会議所等、地域人材活用） ・職業講話（ハローワーク、企業等との連携）	A	A	・立川青年会議所と連携をとり、３年生を対象に模擬面接練習を実施した。２年生はSDGsに積極的に取り組んでいる企業によるオンライン職業講話、ハローワーク職員を招聘した職業講話を実施。 ・面接ガイドを活用し、面接の心構え、態度等を深く学んだ。 ・学ぶ意義や進路の必要性を「進路だより」や「進路説明会」を通して伝え、意識を高めることができた。 ・管理職との面接練習を、対象生徒に実施した。	・地域人材をさらに活用していく。特に、特別の教科 道徳及び総合的な学習の時間でゲストティーチャーを招聘したい。 ・立川青年会議所と今後も連携をとり、SDGsに関する内容を深めていきたい。 ・試験に面接があるないに関わらず、志望動機や自己PR、作文や小論文を全員が真剣に考えられるようにし、進路への意識を高めさせたい。	・現在は様々な職業の選択肢があるので、従来の職場体験に代わる取組も必要なのでは。 ・３年ぶりに模擬面接ができたことは。受験生に安心感を与えられたのではないか。 ・地域人材を活用し、身近な人から進路について学べるとよい。
			地域や外部協力者と連携した教育活動	・ひまわり畑プロジェクト ・国際交流（１年）　・セーフティ教室 ・租税教室（３年） ・SDGｓの取組（全学年　全教科）	B	B	・地域の協力を得ながら、ひまわり畑プロジェクト及び租税教室を実施。国際交流は今年度も中止。4月は立川警察署と連携しセーフティ教室を実施しインターネット利用時のルールやモラル、危険性を学んだ。11月はスケアードストレイトを実施して自転車事故について学んだ。 ・国立三中独自に作成した「SDGs三中プログラム」基づいて、全学年で授業を実施した。JICA青年海外協力隊派遣経験者を講師として招聘し、１年生対象の講演会を実施した。学習総合発表会にて、全学年の代表者がSDGsに関する発表を行い、指導・講評をいただく。	・「活動あって学びなし」とならないよう、学習のねらい、過程、振り返り等、活動の意義を明示し、理解させた上で指導を継続する。 ・全学年分の「SDGs三中プログラム」をより学びやすいよう改良する。今年度の教育計画をふり返り、プログラムの授業時数などを見直す。 ・今年度初めて実施したトヨタ自動車やタカラトミーといった企業による職業講話を検証し、来年度の学習につなげる。 ・コロナ禍で国際交流が３年続けて実施できないのが残念である。再開を念頭に次年度以降も準備はしておきたい。	・コロナ禍ではあるが、校外学習が実施できたのはよかった。 ・より興味を持てるような職業講話を考え、その実施のために数多くの抽選に申し込んだとのこと。講話だけでなく、自分の人生や職業について考えるなど夢がふくらむ活動ができたことと思う。 ・体験等により心身が鍛えられるが、聞くこと見ることでもそうできるよう、繰り返すことも大切である。
			体験的な学習の充実	・修学旅行（３年）・職業講話（２年） ・校外学習（１年、２年） ・自然体験教室（１年スキー教室）	A	A	・３年ぶりに修学旅行を実施。職場体験学習に代え職業講話を実施(トヨタ自動車、タカラトミー)。 ・１年生は体験型英語学習施設「TOKYO GLOBAL GATEWAY」を訪問し、行事のねらいを意識しながら校外学習に取り組むことができた。２年生は校外学習で都内巡りを実施し、修学旅行につなげることができた。		
		学校2020レガシーの構築		・オリンピアン、パラリンピアンによる講演会の実施（１回） ・車いすバスケットボール体験 ・東京グローバルゲートウェイ(TGG)の活用	A	A	・１年生は、１学期にパラリンピアンを招聘し、車いすバスケットボール体験を実施した。パラリンピアンの話を聞き、実際に競技を体験をすることでの教育的効果はとても大きかった。 ・２学期には、ブラインドサッカー元日本代表の方の講演と実技体験会を全校で行い、東京2020のレガシー継承に役立てた。 ・1年生は校外学習としてTGGを訪問し、英語をもっと上手に話したいという意欲が高まった。	・体験活動をより充実させる為に、事前学習教材の見直しを行い、生徒の意識をより高めさせた上で体験につなげていく。 ・生徒の英語力を見極め、レベル設定を行う。	・体験活動が子供の考え方を広がることにもつながるので、ぜひ続けてほしい。 ・事前学習で興味関心を高めた上で取り組むことが大切だと思う。 ・これからも意欲的な取組を楽しみにしている。

達成状況の指標　A：　100 %～ 80 %　B 80 %～50 %　C 50 %～ 0 %